

Primal

ハワイ 暗黒殺人

女検死官ジェシカ・
コラン・シリーズ

Robert W. Walker

ロバート・ウォーカー

瓜生知寿子＝訳

上

Instinct

◎訳者略歴 瓜生知寿子（うりう ちずこ）

英米文学翻訳家。訳書に、ウォーカー『女検死官ジェシカ・コラン』『第六級暴力殺人』、ハイスミス『ガラスの独房』（以上、扶桑社ミステリー文庫）などがある。

ハワイ暗黒殺人（上）

発行日 1999年1月30日第1刷

著 者 ロバート・ウォーカー

訳 者 瓜生知寿子

発行者 中村 守

発行所 株式会社 扶桑社

東京都港区海岸1-15-1 〒105-8070 TEL.(03)5403-8888(代)

印刷・製本 凸版印刷株式会社

万一、乱丁落丁の場合はお取り替えいたします。

Japanese edition © 1999 by Fusosha

ISBN4-594-02640-0 C0197

Printed in Japan(検印省略)

定価はカバーに表示してあります。



PRIMAL INSTINCT (Vol. 1)

by Robert W. Walker

Copyright © 1999 by Fusosha.

Original English language edition

Copyright © 1994 by Robert W. Walker.

All rights reserved including the right of
reproduction in whole or in part in any form.

This edition published by arrangement with

The Berkley Publishing Group,

a division of The Putnam Berkley Group, Inc.

through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

ハワイをこよなく愛し

わたしと妻を結婚二十五周年記念旅行に

オアフ島とマウイ島へとひっぱり出してくれた

ドナ&ビル・リーミー夫妻に。

^{アロハ・アイカネ}
ありがとう、ともだち

謝辞

ピジン英語とハワイの島々の民間伝承について貴重な知識を授けてくれたハワイ生まれのフアン・カツダ・ペネラ、ありがとう。

T・I・ハリス、サリー・カールソン、エド・ハム、ベス・ウィルカーソン、ジュリー・ペインター、ジーナ・バートレット、ジム・クラーク、ジョン・ボウデン、B・J・ランツ、リン・ザトラー、ロリ・キャンベル・ベイカー、リー・シャーゲル、フランシス・グレッツピ、そして、その他大勢の学生諸君。いろいろ教えてくれてありがとう。

Rape in Paradise (1966)の著者セオン・ライト、*The Wild Wind* (1991)の著者マジョリー・シンクレア、*Who Killed Precious*の著者H・ポール・ジェファーズ、『FBI心理分析官』の著者、ロバート・K・レスラーとトム・シャットマン、ありがとう。

ハワイ大学出版局と、『ニュー・ポケット・ハワイアン・ディクシヨナリー』の著者メアリー・カウエナ・プクイとサミュエル・H・エルバート、ありがとう。O・A・ブッシュネル編、ジョセフ・フィーハー挿絵によるガバン・ドーズの『イラストレイテッド・アトラス・オブ・ハワイ』も、大いに役に立ちました。

そして、滞在中、温かくもてなしてくださった——当然アメリカ国民である——ハワイのみなさん、ありがとう。

最後に、この犯罪小説執筆中の二年間、辛抱強くわたしにつきあってくれた妻^{ワヒイーネ}シエリルと息子^{カネ}ステイブンに、心から感謝します。

ハワイ暗黒殺人（上）

N
↑

モロカイ島

マウイ島

カフルイ

ワイルア

ハナ・ハイウェイ

ハナ

七つの聖池

キパフル

ハレアカラ火山

モロキニ島

アララケイキ海峡

カホオラヴエ島

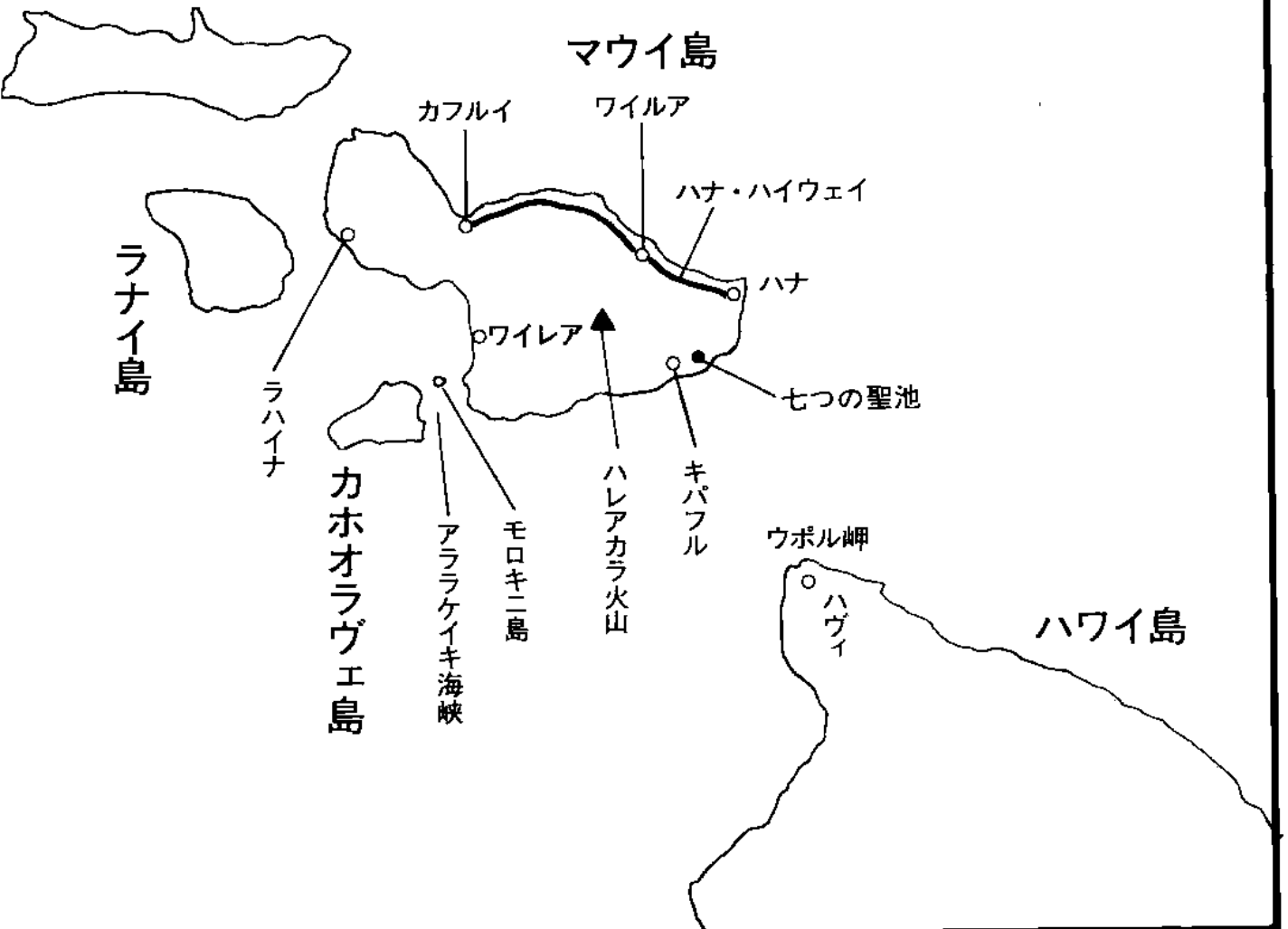
ラハイナ

ラナイ島

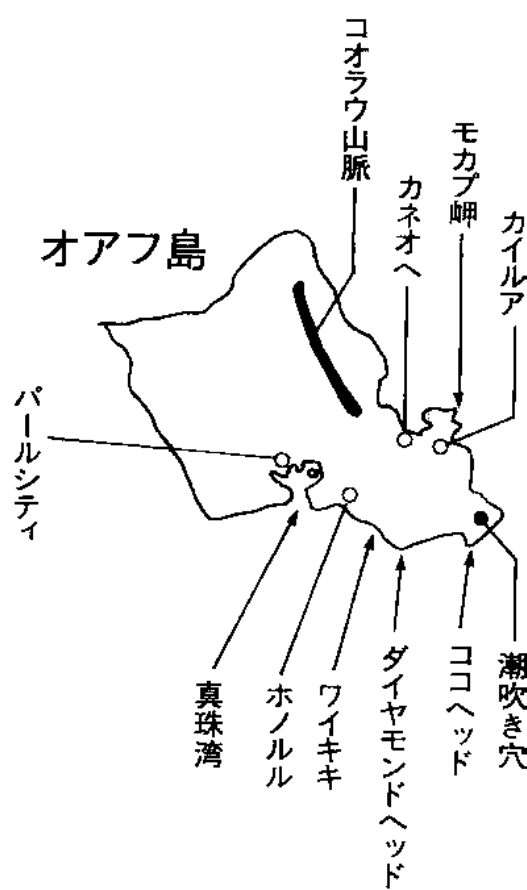
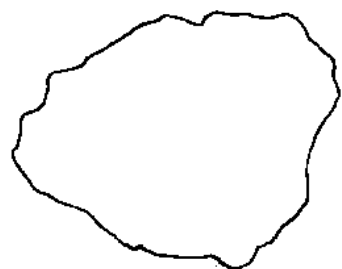
ウポル岬

ハヴィ

ハワイ島



カウアイ島



ハワイ諸島 (部分)

登場人物

ジェシカ・コラン	—————	F B I の検死官
ジェームズ(ジム)・パリー	—————	F B I ハワイ支局長
トニー・ガグリアーノ	}	F B I ハワイ支局捜査官
カルバン・ヘイリー		
テリー・リノ		
ラウ	—————	F B I ハワイ支局検査官
デιβ・スカンロン	—————	ホノルル市警察本部長
アラン・カニオラ	}	ホノルル市警察巡査
トム・ヒラーニ		
ネイサン(ネイト)・アイバーズ	—————	ホノルル市警察巡査部長
ジョセフ(ジョー)・カニオラ	—————	新聞記者。アランの父
ロパカ・コウォナ	—————	殺人者
リンダ(リナ)・カハラ	}	被害者。ハワイ大学の学生
キア・ワイレア		
ジョージ・オニイワ	—————	リンダのボーイフレンド
ドナルド・クラクストン	—————	ハワイ大学の教授
ヒイラニ	—————	リカーショップの店員
ハローレ(ハル)・エヴェロ	—————	酒場(パニオロ)の経営者
ロメレア	—————	シャーマン
ベン・アワイ	—————	ガイド
ポール・ゼイネック	—————	F B I 第4課課長
マシュー(マット)・マティサック	—————	殺人犯。連邦刑務所に収監

一九九五年七月十二日、午前一時三十五分

ハワイ、オアフ島、ホノルルの外れ、ココヘッド噴火口付近……

ハワイでいちばん人気のあるロック専門ラジオ局KBHT「ホット・ハワイ!」。男はカーステレオのボリュームをいっぱいにあげ、エルビス・プレスリーの『冷たくしないで』に合わせてむせび泣くように唄っていた。そして、忍び笑いをもらしてから、またお粗末な物まねを続けた。「もう手遅れさ、ヘイ、ケリア、ハニー……もう手遅れ。だから俺に辛くあたるなよ、な、ベイビー?」

プレスリーの曲で巧い替え歌ができたものだ。男は悦にいったようにくすくす笑いながら、助手席に手をのばし、血だらけの上半身から醜く傷ついた頭部を持ちあげて、ケリアと呼んでいるその少女の空洞と化した目をじつとのぞきこんだ。それから、しばらくのあいだ、その少女が手首から先をすっぱり切断されているのをながめていた。手はどこにもない。切り落とす

た記憶もなければ、その手を氷詰めにした記憶もないのだが、もし車の中に落ちているのなら、うちに帰ってからきちんと保存しておかなければならない。

あの行為の最中、自分が何をしているかについて、ロパカはあまりよくおぼえていない。一部始終を思い出せるのは、しばし鬱状態が続き、断片的に記憶がよみがえる期間が何週間かあって、そのあとのことである。そしてそれから何カ月かは、死んだ少女の手に見入るたびに、あのときの体験がそっくりそのままよみがえってくる。一時的にはあるが、そのときと、次の殺しをやっているときだけ、彼は鬱の気分から解放されている。手くらいもらっておいても、神様は何も言わないだろう。彼はいつもそう思っている。

“ケリア”彼は脇にいる死んだ少女に無言で語りかけた。“おまえは俺に優しくしてくれる。今も、これから先もずっと……”考えただけで胸にじんとくるのは、プレスリーの歌がバックだからだろう。

ケリアとはずいぶん長い時間一緒にいた。ひと晩ずっとそばにいたのだから、もうそろそろ送り届けなくてはいけない。きょうは闇夜。ビュイックの車内も真っ暗。わが身の安全は保証されている。ロパカはもう一度死んだ少女のうつろな目をじつとのぞきこんだ。こうして死者の瞳の奥の奥まで凝視する。これも、楽しみのひとつである。

プレスリーの曲が終わって、ニール・ダイヤモンドの歌が始まった。「ぼくはもう君の思いのまま……」ロパカのしわがれ声が、甘くとろけるようなニール・ダイヤモンドの歌声と重なった。「ぼくはもう君の思いのまま……君の思いのまま……ああ……ああ……ああーっ！」

オアフ島とホノルルの町に貿易風が吹き荒れるようになって、すでに数週間が過ぎようとしていた。マウイ島にあるハレアカラ火山の頂上から吹きおろす風の渦は、このあたりにおりてくるころにはめいっばい加速がついている。絶え間なく風が吹きあれるこの季節は、観光客が特に多い。絵のようにきれいな浜辺で食事をしたり、月明かりに照らされながら砂浜を散歩したりできるからである。小さな虫は風に吹きとばされてしまうので、バルコニーで抱きあつても、虫に刺されることもない。だが、殺せ、どんどん殺せとロパカをそそのかすのも、この貿易風なのだ。

月のない夜空は荒涼としていて、ラベンダー色の明かりに照らされたアラモアナ大通り沿いの街路樹に、風がたたきつけている。車が今にもふわりと浮きあがつて横転しそうだ。これは暴君のしわざにちがいない。島の神カネロアが激しく呼吸しているのだ。すさまじい突風に見舞われるたびに、ロパカはそう思う。キリスト教で言えば魔王。偉大なカネロアはおそらく、今夜はよくやったとほめてくれているのだろう。毎年この季節になると島の山側から「長い」風とともに駆けおりてくる熱い声が、破られたタブー「カプス」のことを語りかけてくる。

ロパカは獲物の残骸をのみこんでくれる飢えた海の待つ方向に向かって、ひたすら車を走らせた。殺せとそそのかすのは風ではなく、神なのかもしれない。そんなことを考えながら。

州道七十二号線の標識が見えた。この先で道路は大小の二股に分かれ、幹線道路のほうはホノルルの町を抜けてオアフ島の南側のシーサイドリゾートへと向かう。

ロパカは決然と、それでいてどこか夢見心地で、細いほうの道路を切り立った崖のほうにの

ぼっていった。眼下はホノルルの南二十五キロほどのところにあるハナウマ湾である。彼が目指すのは、その五キロ先。オアフ島の最南端だ。そこは潮吹き穴ブローホールと呼ばれる観光名所になっていて、昼間は訪れるひとも多い。しかし、夜は人影もなくひっそりしている。太平洋に向かつて突き出している火山岩の岩棚と、その割れ目の奥にできた洞窟。彼はいつも、少女の死体をその洞窟に投げこむことにしている。

洞窟の入り口めがけて押し寄せる太平洋の荒波は、潮吹き穴ブローホールを駆け抜け、鯨が潮を吹いていくかのように大空にしぶきをあげる。五、六メートルもの高さになる波しぶきは、さながら間欠泉けつせんの噴出だ。海水と地表が激しくぶつかりあう潮吹き穴ブローホールにものを投げこめば、ひとの体でも一瞬のうちに粉碎されてしまう。ロパカの犯罪の証拠も、ものの数分であとかたもなく消え去ってくれる。今までも、いつもそうだった。

少女が着ていた血だらけになった衣類は、ひとくくりにしてある。あとでどこかに棄すてるつもりだ。これであの娘は、何も残さずひっそりとこの世から姿を消す。ホノルルで売春婦をしていたということも、誰にも知られずに。

「そう、そう」彼はぶつぶつ言いながら、潮吹き穴ブローホールを見おろす位置にある舗装のゆきとどいた駐車場に入ってしまった。「貿易風の季節なんだよな」

車をおりると、風が脚にまとわりついた。最初は何か動物がじゃれついてきて、早くやれとはやしたてているようだった風が、やがて優しい父親が背後から押してくれているような雰囲気になってきた。ケリアが生きていて、車の向こう側から歩いてきたら、ドレスのすそが風で

舞いあがって、隠れていた部分が丸見えになっていたにちがいない。ホノルルの街娼はみな、風に任せて商売道具を陳列する。しかし、ケリアはもうゆうべのように歩いたりしゃべったり泣いたりはしない。

午前一時四十分、ココヘッド道路

アラン・カニオラ巡査はワイアラエ通りをパトロールしていた。市の中心部からオアフ島の南端に向かう幹線道路である。その日も朝から、いつものように路上でのけんか騒ぎと誘拐とおぼしき事件の連絡が入っていた。ひとつは、ちよつとした事故をめぐる運転手どうしのけんか、もうひとつは、アラワイ通りで少女が車に連れこまれ、いたずらをされているというものだった。この手の事件は、駆けつけてみたらただの痴話げんかだったとか、売春婦とそのポン引きのいざこざだったということも多いのだが、行ってみないことには事情はわからない。どんな車なのか、襲ったのは誰なのか、今ひとつはつきりしないが、どうやらカニオラが知っているポン引きではなさそうだ。連絡によると、車はつや消しの茶色か栗色で、ウィンドーは薄い青色、車体はでこぼこだらけだがエンジンは「すこぶる調子がいい」ということで、それ以外には目立った特徴はないらしい。

今、目の前を走っている車は手入れの悪い栗色のビュイック・セダンだ。島の南端にある火山活動でできた岬ココヘッドのほうに向かつて、そうとうなスピードで走っている。なんとなく